

電子ジャーナルへのアクセスルート

－愛知医科大学における調査－

小林晴子, 坪内政義

愛知医科大学医学情報センター (図書館)

背景・目的：電子ジャーナルは、フルテキストへのアクセスルートを格段に増加させた。当館でも、アクセスルートの確保に努めているが、個々のリンク作業の労力や、紙媒体中心のシステムで電子ジャーナルを管理することの難しさが課題となっている。そこで、サービスのあり方と書誌・所蔵データの管理方法を検討するため、利用者のアクセスパターンや満足度等をアンケート方式により調査した。

調査方法：(1)愛知医科大学教職員 323 名を対象に 2005 年 5 月にアンケートを実施。45 名から回答を得た。回答者の内訳は、基礎科学 (2 名)、基礎医学 (14 名)、臨床医学 (26 名)、看護 (3 名)。(2)分子医科学を研究対象とする教職員を対象に Journal of Biological Chemistry (JBC) での、フルテキストへのアクセスパターンについて 2005 年 5 月にアンケートを実施。14 名から回答を得た。

結果：(1)アクセスルート別評価の割合は、右図のとおりである。PubMed の評価が 1 番高く (92%)、アクセス頻度も「週 2、3 回」の回答が多かった。また、Yahoo などの検索エンジンも「毎日」の利用が 53% を占め評価も高かった (82%)。一方、OPAC は、目録検索を主体としているため、用途の違いはあるものの、「わからない」(評価できない) の割合が 58%、アクセス頻度も「ほとんど使わない」の回答が目立ち、認知度・利用度の低さが明らかになった。

(2) JBC フルテキストへのアクセスパターンを利用頻度の高い順に挙げてもらった。

「PubMed⇒検索⇒フルテキスト」ルートを 1 番に

挙げた人が 14 名中 12 名で、もっとも多かった。その他には

「JBC ホームページ⇒検索⇒フルテキスト」や「JBC ホームページ⇒コンテンツ⇒フルテキスト」「他文献の参考文献リンク⇒フルテキスト」も利用するとの回答を得た。

考察：データベースとのリンクの有効性は高く、今後もデータベース側との連携が必要である。また、OPAC の利用度は低かったが、当館ではプリント版とともに電子ジャーナルの書誌を OPAC に搭載し、冊子体目録や PubMedLinkOut に利用しており、OPAC の書誌作成は不可欠である。今後、利用パターンをふまえたアクセス環境を整備するために、管理の一元化やリンク作業の簡便化、用途に応じたデータ抽出などを可能にする電子情報資源管理システム (ERMS) の構築が必要と考える。

文献：尾城孝一. 電子情報資源管理システム-DLF/ERMI の取り組みを中心として-. 情報管理

2004;47(8):519-27.

